史の意義である。テクストの内在分析は、そのような思想史の手段であって目的ではない。その意味で、本書の成果をふまえ、宣長を通じて一八世紀末の日本がいかに捉え直されるのか、活発な議論が今後行われることを期待してやまない。

［付記］本稿は日本学術振興会の研究助成および文部省科学技術研究費補助金（特別研究員奨励金）による研究成果の一部である。

（日本学術振興会特別研究員）

M・ウィリアム・スティール著『もう一つの近代——側面からみた幕末明治』

（ぺりかん社、一九九八年）

松田　宏一郎

はじめに

本書は、著者がこれまで発表してきた一九八一年から一九九六年にわたる論考をまとめたものであり（ひとつの未発表論文を含む）、対象時期としては開国・明治維新期の研究が中心となるものの、扱っている問題は多岐にわたっている。一冊にまとめられるにあたって、幕末の瓦版や浮世絵版画を主たる素材にした第一部、勝海舟・西郷隆盛などの中心的指導者の政治意識を分析した第二部、地方の村レベルでの政治的リーダーを分析した第三部、柳宗悦論からなる第四部といった構成に整理されている。著者の研究の良さは、英語圏の研究者らしい広いバックグラウンドをうかがわせる問題設定の大胆さと、日本にベースをおいている利点をいかし、中心的な政治家や思想家だけではなく地方史や民衆史などへの目配りの良さをあわせもっている点にあるが、本書ではその点が良く反映されている。

ここに収められた論考に通底する関心は、序文にも簡単に整

理されているが、単純化していえば、明治維新のとらえかたの見直しである。近代国民国家の形成と中央集権化、政府主導型の国民意識の形成、それらへの対抗思想・運動と挫折といった筋書きを軸として明治維新を語る一般的見解に対して、政治指導者から村のリーダーにいたるまでの具体的な人々の精神と行動とに開国・明治維新期の変動が与えた波紋の様相をできるだけリアルに描写することによって、「明治維新」理解の公定的硬直性を、おだやかにほぐしてしまおうとするところに狙いがあると考えられる。また、本書所収の諸論文を研究史の潮流との関係から見るならば、中心的な政治家や思想家の言説分析から地方の日常的生活秩序への関心、さらには視覚的史料を用いて、より言語化されにくい歴史的な生活感情の世界を理解しようとする研究へといった、近代日本史研究にはもちろん、日本に限らず歴史研究全般にみられる流れに即しながらも、それらの方法的違いを対立させるよりは組み合わせる方向で活かしていこうという意図がうかがえる。[1] 以下章立てに即して本書の内容を見ていくことにしよう。

一

まず第一部（第一―三章）「自国の発見」は、開国期の瓦版を素材にした二編と一八六八年という年にあらわれた諷刺画に着目し内戦を庶民がどうとらえたかを探る一編からなる。第一・二章では黒船や横浜の情景を主題とした瓦版の中から、庶民の西洋への好奇心と敵愾心、また幕府の外交交渉への幻滅などが描かれたものを分類・紹介している。そして蒸気機関車や電信機などへの賛美からは庶民の新しい技術に対する柔軟性を、一八六〇年代初頭の横浜絵からは異国の風俗に対する好意的な好奇心を、相撲力士におどろくアメリカ兵や戯画的な神仏に外国人がやりこめられる絵などからは「彼らなりのナショナリズムともいうべきもの」を、安政の大地震の象徴である鯰がペリーをこらしめようとする足下でおろおろする武士の絵からは、国内の社会不安と対外的不安、そして無力な統治者への侮蔑的な意識の巧みな組み合わせが読み取られる。これらすべてが混然となって庶民の中にナショナリズムと呼ぶべき意識の原型を形成していったとする著者の主張は妥当であろう。「他者」というものの認識・対抗意識・「自己」の側の統合の要求（そしてそれにうまく対応できない統治階級への不満）がこれらの版画の中にうまく表されていることは、明確である。

ここに欠けているものが政治参加の意識だ、とする主張がどこからかなされるとすれば、それに対するある種の答えが第三章「一八六八年の江戸」であろう。薩長側、徳川側を問わずその指導者達を揶揄する木版画は、一種のシニシズムにとどまるとしても政治ジャーナリズムの一つの原型であろうし、一八六八年に突然大量に出現したほとんどが親徳川の新聞は、形成不利な陣営の異義申し立てをジャーナリズムを通じて不特定多数に配付するという、新しいタイプの政治空間形成の一つの初期

的現象と見ることも可能であろう。ただし著者は政治参加という文脈でのナショナリズム形成を強引に読み込むわけではない。むしろ江戸の市民がもつ徳川家への「恩義」（天皇の東京遷幸を記念してふるまわれた樽酒を拒否する程頑固なものではありえなかったとしても）と生活保守主義的気分を指摘してこの章はしめくくられる。

第一部は、開国や内戦によって受ける生活への打撃を、笑いを武器として心理的に防衛しようとする庶民のある意味でしたたかな柔軟性を、またその柔軟性の中から現れるナショナリズムと対外意識を、視覚的な史料を中心に描出しており、それ自体が読者を引き込む魅力をもっている。ただし、政治情報が視覚化され半ば娯楽として消費される現象からは、その消費者はそもそも「庶民」なのかどうか、あるいはそのようなものを求める「庶民」とはいかなる人々なのかという問題について、もう少し検討すべき余地もあろう。幕末の錦絵の中にはかなり玄人筋の政界情報が描かれているものもあり、単なる「庶民」の素朴な日常感覚がそこに見いだされるとも言い難い[2]。この点については、もし比較歴史学的分析をより前面に出していたなら、興味深い知見をより強く打ち出すことができたのではないだろうか。たとえば、政治的秩序の流動化と大衆ジャーナリズムの活性化は十八世紀の英国などでも顕著にあらわれており、研究も多いが、政治漫画は本当に popular journalism といえるかどうかについては議論がある[3]。

またここで分析されている現象は、公共圏の形成という観点から考えることも可能であろう。public sphere 形成という問題は、幕末情報史研究においても関心をもたれている[4]が、この点でも他の社会との比較は役立つと思われる。たとえば、清末民初の中国社会を公共圏形成という視点から分析する研究は近年盛んになっている[5]。著者の指摘する「common culture としての新しいナショナリズムと新しいインターナショナリズム」（一四頁）における commonness の捉え方は、単なる政治経済権力の外にある人々としての「庶民」を示すのではなく、「共有性」の意味が含まれているように見えるとすれば、public sphere の形成という視角と交差するところがあるかどうか、興味深い論点になりえないだろうか。

二

第二部（第四―七章）「国家主義とその限界」は、本書の中では比較的伝統的な手法で叙述されている。まず第四から第六章では勝海舟の政治思想を、横井小楠との比較、江戸開城および徳川家の処遇をめぐる交渉、および「主家への恩義」をめぐる言説分析を通じて考察している。勝と横井との比較の焦点は二人の「公・私」概念にある。著者の整理（一二三頁）によれば勝の「公」とは、第一に政治的決定のための公開の討議、第二に（統治階級内の）身分原理に対抗する平等主義、第三に日本全体の利害を「公」としその下位の利害を「私」とする考え方

を表現したものである。付け加えるならば、世界に通用するという意味での「公」という用法もあり、これらの意味を「公」という字で表現することによって、それぞれの要素の連関を想起させる点で、第四章において著者が指摘するとおり、勝と横井には共通点が見られる。

第五、六章における勝の徳川家への忠誠のありかたの分析は、上記の「公」問題が軸となる。単純化してしまえば、幕末期の勝の幕府政治中枢への批判は、徳川家を、日本という国家を前提とした「公」権力へと転換するための努力を示している。また、江戸城明け渡し後の徳川家を守るための交渉から見出せるのは、「公」原理は「忠」によってこそ支えられるが「忠」は具体的対象への「恩」抜きには発動し得ず、しかもその「恩」の対象と「公」原理は矛盾することがある、という問題を勝自身がどう対処しなければならなかったかという点である。「封建的忠誠心」と「近代的国家意識」との矛盾だ、というだけではとらえきれない、実際に政治行動に心理的エネルギーを供給する契機と当の政治行動の目標設定とが調和することのない困難な状況に（それこそが政治の本質であるともいえるかもしれないが）、かなり知的な自己正当化（「主家への忠」は結局「皇国の御為」になると勝は言う。一六八頁）をおこないつつ対処した勝海舟のケースの面白さがよく描かれている。[6]

第七章における西郷隆盛論は、別の形の「公」意識の分析である。残した言説からは筋を見つけにくい西郷を分析にするにあたって、ここでは文化人類学者 Victor Turner の social drama の概念を応用し、西郷が英雄の「型」を自覚的に演じることで「公」的価値を体現して見せようとしたと論じられる。知的な操作に巧みな勝とは一見対照的な西郷が、ある意味でしたたかな（シニカルではないとしても）自己演出をおこなっていたという観点は、政治指導者にとっては自己の人格もまたメディアであるという、当然だが意外に歴史研究に活かされないポイントをついたものである。この点は、第五章に指摘されている、勝と西郷の江戸城明け渡しをめぐる交渉が、単なる両者の人格の共鳴と了解（「腹芸」）よりも、明確な利害要求の応酬と妥協の結果であるという指摘にかかわっている。西郷は勝とタイプは違うとしても、また交渉に使える資源を総動員してわたりあうという意味で、タフで合理的な政治家だったというわけである。

第二部は、著者の長年の研究蓄積が背後にあり、描き出される人物の造形は明快にまとまっているが、政治と思想との関係という点について、もう一段深いところまで考えてみたいと感じるのは評者だけではないだろう。たとえば評者の考えでは、統治者が被治者のために実現すべき価値とか社会一般についての理想の表現というよりも、流動化した政治世界の再構成原理とその領域内での規範を表現するための言説として「公」概念が多用された点自体に、非常に幕末維新期的な、また日本的な（中国思想における公私観との違いという点などを含めて）特性が

示されている。勝たちの「公」についての議論もまたその中でこそ、単なる理想の表明以上に当人達にリアリティを持ち得たのではないだろうか。[7]

三

第三部（第八―一一章）「地方主義の実践」は、村の利益のために上位権力としぶとく交渉し、あるいは実力行使の先頭に立つこともある地方の指導者達が、旧体制下と動機を同じくしながら、中央政治に関心を持ち新しく政治世界に導入された語彙とイデオロギーを使うようになる過程と、その中での政治意識の分析である。明治維新をはさんでの連続性と変化、中央政治の求心力と地方政治の意識の強化の相乗的な発展が検討される。したがって、新しい中央政治に地方の政治意識が吸収されるという現象にとらわれるよりも、新しい時代の新しい地方意識の再構成がいかになされたかに、著者は議論を集中しようとしている。「地方への志向と社会的文化的多元性が『近代の発展』のもうひとつの主な産物であった」ことを近代日本の政治的発展を研究するための視点として提案したい、と著者は述べている（三一九頁）。

第八章では田中正造がかかわった小中村の六角騒動、鹿沼宿の世直し一揆、那須事件における村と明治政府との交渉が、第九章では廃藩後の栃木県における町村会設立運動が、第一一章では北多摩郡の豪農、吉野泰三の自由民権期から国会開設期にいたる政治活動の軌跡が事例としてとりあげられ、[8]幕末期からの村の自律性と利益を守るための行動と意識が明らかな連続性を保ちながら、しかも「日本人民」「人民の議政の権」「自治」という新しい語彙を獲得していき、旧来の蓄積を十分活かした上での新しい政治行動スタイルへと変換をとげていく過程が、中央政治およびジャーナリズムの動向と照合されつつ論じられている。第一〇章だけは地方の事例よりは中央政治に重心があるという点ではやや傾向の異なる論文で、大同団結運動期の中央政界の動向と地方政界の連動関係が構築されていくさまが、「参加危機 participation crisis」という政治学の概念を応用しながら描かれている。

著者によれば、「参加危機」が収拾不能の混乱にいたらなかったのは、国会開設・総選挙が焦点となるはるか以前、さかのぼれば徳川期から地方に「政治生活」の蓄積があり、アクターとしての相互の存在承認、目標の共有への努力、利益調整のための妥協、なによりもそのための政治空間の共有意識が、生きている「遺産」だったからである。評者は一五年前にこの論文を読んだ時の新鮮な印象をあらためて思い出した。この論文に込められたアイデア、すなわち「結合力としてのナショナリズム」、「官民一体となって政治的責任を分担する政治的伝統」、徳川時代の「村落自治」のための「政治技術」、が「政治参加の近代的形態」の構築にとって不可欠の基盤として生きていた、という主張がのちに本書におさめられた諸論文においてひとつ

ひとつ再検討されていったと見ることもできる。

第三部の論考を研究史の流れと照らしてみると、日本における地域史、農民史の研究を踏まえているのはもちろんだが、Anne Walthall, Steven Vlastos, William Kelly らへの言及からも、一九八〇年代以降の英語圏における近世日本を対象とする Peasant Studies の高まりにこたえ、それを明治研究に応用しようとする著者の意図がうかがえる。[9] 特に第八章の結論部では、社会学者 Philip Corrigan と Derek Sayer の英国における下からの国家意識形成の研究や James C. Scott の東南アジアの農民の反抗の研究など、比較論的および方法論的バックグラウンドが言及され、第三部に単なる事例研究以上の含意を与えている。「モラル・エコノミー」という語もあらわれ、著者が自己の研究を、E. P. Thompson 以来の「下からの視点」を重視する英国マルクス主義歴史学が開いたある流れと、そのアイデアのアジア研究への応用（スコットはまさにその代表者）という動向にかかわるものとして位置付けようとしているように見える部分もある。その点でもたとえばVlastosの研究と呼応する部分がある。[10] しかし、中央政治の動きやその担い手たちの意識が、単なる抑圧とコントロールの主体としてではなく論じられている点から見て、著者の関心は中央政治と地方政治の相互関係の形成過程それ自体にあり、評者は、モラル・エコノミーや上位権力への抵抗の問題を鍵になされている研究とは傾向が異なるという印象を得た。著者がもともと政治的リーダーの研究もカバーしていたことがこのバランス感覚に結びついたのであろう。つけくわえるなら、著者が積極的に異なる方法や立場を「組み合わせ」、活用する意思があるのであれば、たとえばSmethurst の近代日本の農村研究に見られた合理的行為者モデルのようなアプローチについても著者がどう考えるのか知りたくはある。[11]

四

第四部「地方主義と国家主義の間」は、柳宗悦論の一章だけからなる。ここでは「文化多元主義（cultural pluralism）」が鍵概念である。この概念は多民族・多言語社会を論じるに使われて久しいが、著者はこれを政策原則や社会分析概念というよりは柳宗悦の主張の特徴を示す概念として用いる。そして柳の朝鮮美術への関心は西欧優越主義的な文化概念への批判として、沖縄の言語問題への関心は日本の近代国家形成が要請する文化の標準化に対する批判として位置付けられる。ただし、柳が単に中央に抵抗する地方という図式ではなく、地方性の豊かさが国家の特性をつくるという論理を採用している点に著者は着目している。「中央」意識形成と「地方」意識形成は近代国家形成における相互関係現象であるという『文化多元主義の政治学』における Crawford Young の指摘が応用され、柳の議論の理解に役立っている。第三部にもヤングへの言及があったが、この章では第三部でも論じたナショナリズムの二つの側面、すなわ

ち中央集権化と地方アイデンティティーの形成という相互的な現象を文化形成論として論じた思想家として柳は扱われていると考えられる。[12]

結　論

以上、本書の構成にしたがいつつその議論の骨格と研究上の意義を見てきた。本書のメリットは、幕末維新期におけるナショナリズム形成という問題に即して、エリートと民衆、中央と地方を相互に排他的な存在としてではなく、またひとくくりの「日本社会」としてでもなく、多様な共鳴と反発の関係として描いてみせた点にある。そのために政治リーダーの言説から瓦版まで異なるタイプの史料と分析方法が動員されているが、それによって構築された像はけっして分裂的ではない。方法論への忠誠を好む向きからは反発が出るかも知れないが、評者はもしろ著者のバランス感覚を評価すると同時に、本書が読者に理論的・比較的研究や歴史研究全体の動向への知見を与える点も意義があると考えている。またこのような描き方が成立すること自体が、明治維新期の日本社会がもつ多様性と統合性のバランス自体の歴史的性格を暗示しているという印象を得るのは評者だけだろうか。

註

（1）　著者も序文で「古い歴史研究の方法と新しいそれの組み合わせ」の意図について簡単に述べている。

（2）　岩下哲典『幕末日本の情報活動――開国の情報史』（雄山閣、二〇〇〇年）第三章「開国前夜における庶民の「情報活動」」は、歌川国芳の戯画を題材に、かなり入り組んだ「政界地図」が「庶民」向けの情報として流通するケースを紹介している。

（3）　十八世紀英国の政治漫画にあらわれるヴィジュアルな情報の消費者は、情報の細かさからいって、文字情報の消費者（ある程度政界事情に通じていて関心の高い）とあまり違わないのではないかという指摘が、Eirwen E. C. Nicholson, "Consumers and Spectators: The Public of the Political Print in Eighteenth-Century England," *History*, Vol. 81, No. 261, January 1996 に見られる。前掲岩下の論文とあわせて考えるならば、「庶民」概念の難しさにつきあたることになろう。

（4）　宮地正人「風説留から見た幕末社会の特質――「公論」世界の端緒的成立」『思想』八三一号、一九九三年九月。なお宮地は幕末に写本や手紙で流通した政治情報の需要は豪農などある程度以上の知識と影響力をもった層からのものであるとしている。宮地は絵画情報についても言及しているが、絵は文字より「大衆的」かどうかについては判断していない。

（5）　たとえば、*Modern China*, Vol. 19, Number 2, April 1993 の特集号参照。また清末中国におけるジャーナリズムと政治的流動化および public sphere 形成の関係に焦点を当てた最近の成果として、Joan Judge, *Print and Politics: 'Shibao' and the Culture of Reform in Late Qing China*, Stanford University Press, 1996.

（6）　武士の「忠」をどう国家意識へと転換するかについては、明治期にもさまざま議論がおきた。評者は福澤諭吉を中心に明治期の議論を整理したことがある。「福澤諭吉と「公」・「私」・「分」の再発見」『立教法学』第四三号、一九九六年。学術文献刊行会『日本史学年次別論文集 近現代三 一九九六年』（朋文出版、一九九九年）に再録。

(7) 日本の「公」は「つながり」の原理というより「領域的」であるという主張は溝口雄三が中国思想と比較しながら繰り返し指摘しており、きわめて興味深い論点である。一歩進めて考えると日本（少なくともある時代の）「公」はある領域の構成原理を論じるための言葉だということも考えられるだろうか。溝口雄三『中国の公と私』（研文出版、一九九五年）、参照。

(8) 吉野泰三については、本書出版のあとになるが三鷹市教育委員会編『多摩の民権と吉野泰三』（一九九九年）が出版された。

(9) Walthall らの著作が相次いで発表された時、日本研究の新しい潮流を意識した上での書評がいくつか書かれた。代表的なものとして、Roger Bowen, "Japanese Peasants: Moral? Rational? Revolutionary? Duped? —A Review Article," *The Journal of Asian Studies* 47, no. 4(November 1988); James W. White, "Scholarly Discourse and Peasant Discontent: Four Studies of Popular Contention in the Tokugawa Period," *Journal of Japanese Studies*, Vol. 15, No. 1, Winter 1989; W. Donald Burton, "Review Essay: Rural and Urban Protest in Tokugawa Japan," *Bulletin of Concerned Asian Scholars*, Vol. 21, no. 1 (1989).

(10) トンプソンの研究が英国史だけでなく歴史研究全般に与えたインパクトを整理した論文として Roger Wells, "E. P. Thompson, Customs in Common and Moral Economy," *The Journal of Peasant Studies*, Vol. 20, No. 2, January 1994. またスコットが用いた "everyday forms" というタームの影響か、著者も第八章に「明治維新期における日々の政治」とタイトルをつけている。

Steven Vlastos, *Peasant Protests and Uprisings in Tokugawa Japan*, University of California Press, 1986 は自己の研究がモラル・エコノミー概念からどのように影響を受けまたどのようにそれに対し批判をしたいかについて結論部 (p.155ff) で論じている。

(11) Richard J. Smethurst, *Agricultural Development and Tenancy Disputes in Japan, 1870-1940*, Princeton University Press, 1986.

(12) さらに多言語国家日本というイメージを柳が描いていたという可能性も否定できないが本章ではそこまでは論じられていない。その点で柳宗悦に触れている研究として、林正寛「伝達と規範意識——多言語社会における人とことば」『アジアから考える1 交錯するアジア』東京大学出版会、一九九三年。

（立教大学教授）